



NO. 44 (通算218)

絵・文・題字
渋谷 一夫

陽炎もえる裏作田

三月から五月は菜の花や大麦・小麦の時期だ。

「菜の花畠に入日薄れ」「朧月夜」の一節だ。

「朧月夜」の一節だ。

昨年の夏、「朧月夜」ゆかりの長野県飯山市の「菜の花公園」に旅してきた。高野辰之が作詞した場所だ。公園は小高い丘陵地にあり、眼下に千曲川が流れ、さらにその先に北信五岳が望め、とてものかな場所だった。

終戦前後の南畑も、似たような情景はよく見られた。ちょうど今頃は、菜の花が咲き乱れ大麦・小麦が緑なしていた。菜の花を見ると、私は亡き

父を思い出す。終戦直後の昭和24年の四月初め、胃ガンで入院していた父が退院した。退院途中、南畑に着くや否や、咲き乱れる菜の花を見て、父が一言つぶやいた。「南畑はいいな…」

二毛作時代の田園

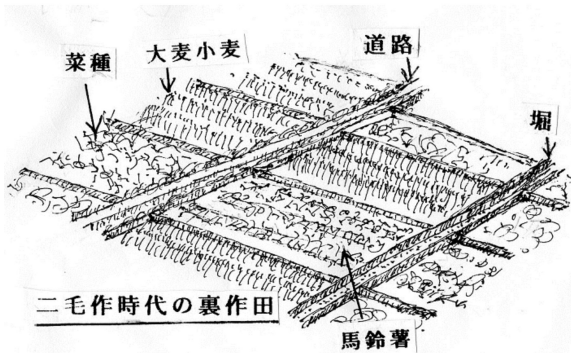
南畑の耕地は、ここ百年大変革をしてきた。

昭和初期までの稲の単作時代、戦中戦後の二毛作時代、そして平成の機械化農法時代だ。

稲の単作時代は、米収穫後は休耕田お休みだ。

年中水浸しの泥田は、冬は殺風景になる。

二毛作時代は、耕地はにぎやかだった。食糧増産のため土地の有効利用を図った。耕地整理だ。大小さまざまな泥田を壊し、1反と5畝の長方形を基準とした田んぼにし、



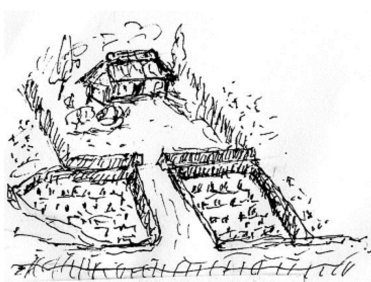
二毛作時代の裏作田

馬鈴薯

必ず道路と堀に接するように造り替えた。従って交換分合も行われた。稲収穫後はすぐ水を落として畑とし、アブラナや大麦・小麦・馬鈴薯などを栽培した。裏作だ。稲作を表作といい、併せて二毛作と呼んでいる。

従って今頃の南畑は、菜種・大麦・小麦・馬鈴薯などで埋め尽くされ、まだ畑同然だったのだ。農作業も人力中心で、耕地は人、人、人で、非常に活気に満ちていた。

それが昭和後期から平成になると、農作業は一変して機械化され、次第に休耕田も増え、形の変わった昔の単作時代に戻った感じになった。



米単作時代の水田

冬の泥田

陽炎もゆる風物詩
二毛作時代は、この時期陽炎がよく見られた。菜の花や大麦・小麦の上面がゆらゆらゆれ動く。のどかな風物詩だった。



陽炎もえる麦畠

陽炎は、風の弱い穏やかな日に起きる。朧月夜もこの頃よく見られた。

かげろうもえて

野は晴れわたる
文部省唱歌「遠足」の情景を思い出す。

だが、最近はおまの見られなくなった。車の走行が激しく空気が乱されるためだろっか。残念である。